



## 歩道は誰のものか

柴生田 晴四  
(経済倶楽部理事長)

▼仕事帰りに自宅近くのコンビニで買い物をして、目の前の横断歩道が青だったので渡ろうと一歩踏み出したその時……。前をかすめて自転車がかんりのスピードで走り抜けました。少しでも急いでいたら跳ね飛ばされることろでした。あるいは自転車で乗っていた人も大ケガをしたかもしれません。

▼省エネへの関心の高まりから、自転車に乗る人が増えています。しかし、自転車を利用

するための環境はあまり改善されていません。それどころか、自転車による対人事故が急増しています。国土交通省は数年前から歩道を走る自転車を車道に戻す方向で対策を進めてきましたか、効果はいまだしといったところ。人がすれ違うのもやっとの狭い歩道で、平気で人を押しのけるように走る自転車は後を絶ちません。後ろからベルを鳴らして歩行者をどけようとする不心得者もいます。歩道は本来歩行者のものであり、自転車は例外的に走らせてもらっているのだということ意識している人がいかに少ないことか。

▼こうしたことになった原因は明らかに交通政策の失敗にあります。もともと車である自転車は歩道を走ることが禁じられていました。

しかし、自動車の普及によって交通量が増加し、渋滞や自動車と自転車の接触事故が増加する中で、自転車利用者の保護を大義名分にとりあえず自転車を歩道に上げるといふ緊急避難措置が取られました。本当のところは、自動車のスムーズな走行の邪魔になる自転車の排除が狙いだったのではないかと私は疑っているのです。

▼当初は、自転車の走行が可能な歩道はその旨の標識が建てられたところだけだったと記憶しています。しかし、いつの間にか自転車はあらゆる歩道を我が物顔に走り回るようになっていきました。歩行者は右側通行、自転車は車と同じ左側通行といった常識も失われ

歩道を渡る人の列を突っ切ろうとする自転車も後を絶ちません。

▼本来は車である自転車を、本来は車から弱者である歩行者のための歩道に上げれば、より弱い者にしわ寄せがくることは明らかです。しかも自転車は車でありながら交通法規などの習得が不要です。ルールが存在することなど考えもしない輩がたくさんいるのです。

▼根本的な対策は自転車専用レーンを増やすことです。一部の歩道を走行可能にし続けるのであれば、そこには標識を必ず掲げ、その一方で自転車利用者への交通教育も義務化すべきでしょう。いずれにしても歩行者の被害が増え続けているにもかかわらず、行政はあまりに怠慢であるといわざるをえません。